

一 次の文章は、小説家の小川洋子さんと心理学者の河合隼雄かわい はやおさんとの対談をまとめた、ある本のあとがきで、河合さんが急に亡くななってしまうので、小川さんが書いたものです。よく読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

①比較的若く、二十代の半ばでデビューした私は、そのときどきのインタビューで、「なぜ小説を書くのですか」と質問されるのが苦痛でなりませんでした。直接そういう言葉で聞かれなくても、自分の小説について語る必要にせまられたとき、書くことの意味を明確にイメージできないでいる自分の未熟さがさらけ出されるようで、こわかったのです。

自分のために書いているのか。それは直感的にちがう気がしていました。こんなちっぽけな自分の中にある何かをはき出すために書いているのだとしたら、きつとすぐに②ゆきづまるだろうという③ヨカンもありました。では他人のためなのか。そう言い切ってしまうと、結局作家は読者にこびているだけなのだと思い直しているようで、ますます本心から遠ざかってゆくばかりです。

よく考えれば、別に理由など説明できなくても④一向に構わないのですが、若いころの私は年上のインタビューたちに少しでも自分を大きく見せようとし、たとえ中味はスカスカでも形だけは⑤キョウコな理屈りくつを求めていたのかもしれませんが。相手の質問を受け取り、その言葉を自分の中にひびかせ、そこから聞こえてくるものに二人でいっしょに耳をすませる、というのではなく、投げこまれた球を打ち返すため、ただ⑥目茶苦茶にバットをふり回していただけなのです。

⑦河合先生の著作を読み、物語というものの解釈かいしやくに出会ったのはちょうどそのころでした。

いくら自然科学が発達して、人間の死について論理的な説明ができるようになったとしても、私の死、私の親しい人の死、については何の解決にもならない。「なぜ死んだのか」と問われ、「出血多量です」と答えても無意味なのである。⑧その恐怖きょうふや悲しみを受け入れるために、物語が必要になってくる。死に続く生、無の中の有を思いえがくこと、つまり物語ることによって初めて人間は、身体と精神、外界と内界、意識と⑨意識を結びつけ、自分を一つに統合できる。人間は表層のなやみによって、深層世界に落ちこんでいるなやみを感じないようにして生きている。表面的な部分には理性によって強化できるが、内面の深いところにあ

る注1混沌は論理的な言語では表現できない。それを表出させ、表層の意識とつなげて心を一つの全体とし、さらに他人ともつながつてゆく、そのために必要なのが物語である。物語に託せば、言葉にできない混沌を言葉にする、という注2不条理が可能になる。生きるとは、自分にふさわしい、自分の物語を作り上げてゆくことに他ならない。

こうした意味合いの解釈にふれた時、私は初めて、書くことの意味が何の無理もなくスムーズに心の中へとしみこんでゆくのを感じました。それまで論理とも言えないとぼしい論理をかき集めてどうにかこうにか保っていた注3虚勢の鎧を、河合先生が放つ光はいとまたやすくすりぬけ、持て余していた私自身の混沌に、新たな方向を指し示して下さったのです。

ああ、そうか。自分は作家だから小説を書いているのではない。だれもが生きながら物語を作っているのだとしたら、⑩のであって、「なぜ書くのか」と聞かれるのは「なぜ生きるのか」と問われるのに等しい。まさにその問いこそが表層の鎧の奥にしまむ混沌であり、それを現実的な⑪スジミチで説明できないのも当然なのだ。説明出来ないからこそ、自分は小説を書いている……。

と、私は深く納得し、同時にまた、現実と注4フィクションがこれほどまでに強く関わり合っているという事実におどろいたのでした。⑬思い切り想像のつばさを飛翔させ、どんなに遠く現実から離陸したつもりでも、物語は宙にふわふわとただよう単なる妄想ではなく、根は必ず、現実を生きる人間の内面と結びついているのです。逆にそうでなければ小説は意味を持たないでしょう。

それにしても物語について、これほど柔軟で、どんな人の心にも寄りそえる解釈を示したのが、作家でも文芸評論家でも文学博士でもなく、注6臨床心理学の専門家であったというのは興味深い事実です。心理分析の治療の現場で、物語という⑭科学的な作り物が重要な役割を果たしているとは、思いもよませんでした。

注1 混沌……多くのものが入りまじって、どうなっているのかわからないようす。

注2 不条理……物事のそうあるべきすじみちに合わないこと。

注3 虚勢……実力ががないのに、いきおいがあるように見せかけること。

注4 フイクション・・・作りごと。作り話。小説。

注5 妄想・・・あり得ないことをあれこれ想像すること。

注6 臨床心理学・・・カウンセリングやセラピーなど、言葉を使って、精神的な病気をかかえる患者をかんじやいやしていくための心理学。

問一 — 部①「比較的若く、二十代の半ばでデビューした私は、そのときどきのインタビュで、『なぜ小説を書くのですか』と

質問されるのが苦痛でなりませんでした。」について、後の問いに答えなさい。

A 筆者が「なぜ小説を書くのですか」と質問されるのが苦痛だった理由を解答らんに合うように文中から五十字以内でぬき出して、始めと終わりのそれぞれ五字を書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

B この「あとがき」を書いているころの筆者はインタビュを受けるときにどうするのが良いと考えていますか。解答らんに合うように文中から六十字以内でぬき出して、始めと終わりのそれぞれ五字を書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問二 — 部②「ゆきづまる」⑩「持て余していた」の本文中での意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

② 「ゆきづまる」 ア いやになる イ 苦しくなる ウ 書けなくなる エ 進めなくなる

⑩ 「持て余していた」 ア 大きすぎてかかえられないでいた

イ 自分の力ではどうにもできないでいた

ウ 押さえられずふりまわされていた

エ あきらめて放り出していた

問三 — 部③・④・⑤・⑥・⑫のカタカナは漢字に直し、漢字はひらがなに直しなさい。

問四 — 部⑦「河合先生の著作を読み、物語というものの解釈に出会ったのはちょうどそのころでした。」について、後の問いに答えなさい。

A 「河合先生」の「物語」というものの解釈」の説明は本文のどこからどこまでですか。始めと終わりのそれぞれ六字を書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

B 「河合先生」が考えていた、生きることと「物語」との関係を解答らんに合うように文中から四十字以内でぬき出して書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 — 部⑧「その」が何を指しているかを書きなさい。

問六 部⑨・⑭に当てはまる最も適当な漢字を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 未 イ 無 ウ 非 エ 不

問七 部⑪に当てはまる最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 私は人間であるがゆえに小説を書いている

イ 私が人間であるためには小説を書くしかない

ウ 私という人間は小説を書くために生きている

問八 — 部⑬「思い切り想像のつばさを飛翔させ、どんなに遠く現実から離陸したつもりでも、物語は宙にふわふわとただよう単なる妄想ではなく、根は必ず、現実を生きる人間の内面と結びついているのです。」とはどういうことですか。解答らんに合うように五十字以内でわかりやすく説明しなさい。(句読点は字数に入れません。)

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

「いとこ同士のぼく、① 智明、ナス、ナスの弟のじゃがまる、② 章くんあきらの五人は、五年前、章くんが言い出してから毎年、夏に章くんのお父さんの別荘べつせうに集まり、一番年上の章くんのリーダーシップの下、夏休みを過ごしていた。しかし、この夏、ぼくは「どうしてもいつも章くんというとおりにしなくてはならないだろう」という疑問を抱き、その気持ちを智明、ナスに打ち明けてしまう。それから、ぼくらは章くんへの不満を陰で口にするようになっていた。」

「王さまは裸だ」ときけんだのは、小さな子供だった。賢い人にだけ見えるといわれて、ありもしない服を身にまとい、大手をふって街を歩いていた裸の王さま。王さまはそのとき、どんな気持ちだったろう？ 憎いのは小さな子供じゃない。それまで王さまをだまして、① 偽物のおせじをふりまいていた連中だったと思う。

章くんは王さまほどばかじゃなかったけど、ぼくらの嘘をあばいたのは、やっぱり小さなじゃがまるだった。別れの前日。

この夏の終了まで、あとわずか二十時間。

ようやくそこまでこぎつけたときになって、じゃがまるはすべてをひっくりかえしてしまったんだ。

その日の天気は最高で、いかにも真夏のピークって感じの一日だった。きのうまでの雨が冗談みたいに、太陽の光が青空いちめにさえわたり、乾いた砂浜には水たまりのような③ 蜃気楼しんきろうがいくつも浮かんでいた。

自由研究の「雲の②カンサツ」にくりだしていったじゃがまるも、④ 注2うだるような外の③アツさにはまいったらしい。

「雲なんてひとつもないっ」

ふうふういいながらもどつてきて、リビングルームの隅のテーブルで、「貝がらの研究」をはじめた。貝がらを一列にならべたり、またならべかえたり、ちよつと重ねてみたり。どうみても遊んでるだけだったけど、研究という建て前で冷房のきいたリビングル―

ムにいたかったんだろう。

ぼくらはソフアアで勉強中だった。

その日の課目は英語だった。

「ナス。ここんとこ、ちよつと読んでみる」

章くんがナスに教科書をまわした。それは中三の教科書で、ぼくらにはまだ早すぎたけど、だからこそ自分が教えてやるんだと、章くんは張りきっていたんだ。

「二九ページの頭からだ」

「ええと。イン、ザ、ノース、オブ、ザ、シテイ、オブ、ヒロシマ……」

④ つつかえつつかえ、ナスが慎重なカタカナ読みをする。単語はさほどむずかしくないから、ナスならすらすら読めるだろう。なのに、わざわざそんな読み方をするナスがおかしくて、ぼくはこみ上げてくる笑いを押し殺した。

そのときだ。

「兄ちゃん、なにしてんだよ。」

テーブルからじゃがまるが不満げな声をあげた。

「へんな発音しないでよ。兄ちゃん、もつとうまいじゃんか。へんな読みかたすると、癖くせになるって、ミスター・エリオットがいつたよ」

時間が凍りつく、とはまさにこのことだろう。ナスは見るからに動揺して耳まで赤らめ、ぼくと智明もこまってうつむいた。

⑤ やばい。こいつはやばいぞ。

「どついうことだ？」

章くんがナスにきくと、

「兄ちゃん、ミスター・エリオットに英語習ってたんだよ、六年間も」

ナスのかわりに、じやがまるが答えた。

「ぼくも今、通つてんだ。まだ兄ちゃんには負けるけどね」

このとき章くんがどんな顔をしていたのか、ぼくは知らない。のぞきこむ勇気なんてとてもなかったから。

ぼくらは気まずくたまりこんだ。

章くんの沈黙ちんもくが不気味ぶきみだった。

⑥ イヨウな緊張感きんちやうかんがリビングルームをとりまく。そのびりびりした空気の意味がわからず、じやがまるは混乱して立ちあがった。

「どうしたの？ みんな」

だれも答えをかえさない。

「ねえ、どうしたの？ どうしちやつたの？」

じやがまるの声が泣き声に近づいていく。

どうしたの、どうしたの、と、じやがまるは必死でくりかえし、たまりかねたナスが「なんでもないよ」とつぶやくと、

「ちがうよっ」

バシッと、ぼくの肩かたになにかがあたった。

「なんでもなくないよ。ぜんぜん、なんでもなくないじゃんかっ」

ふりかえると、真っ赤な顔のじやがまるが両手に貝にがらを握りしめている。口もとをぶるぶると震ふるわせて、完全にベそをかきながら、

「みんなへんだよ。おかしいよ。この夏はなんだか、どうかしてるよ。兄ちゃんも注恭きやうくんも智明くんも、みんなへんなんなつち

やったよ。ぜんぜんちがくなつちやったよ。ちがくはないのは、章くんだけだよ。こんなのいやだ、いやだ、いやだっ」

またたくまにすべての貝にがらをぶちまけると、

「もとにもどしてよっ」

ひと言、絶叫^{ぜっきやう}して、じやがまるはりビングルームを飛びだしていった。

バシヤン。じやがまるの叩^{たた}きつけた扉^{とびら}がうなり声をあげる。

ぼくらはみんな、あつけにとられていた。

いったいなにが起こったんだ？

うつろな頭で考えながら、ぼくは床に散った貝がらをながめまわした。

⑦ まっふたつに割れた貝がら。

こなごなに砕^{くだ}けた貝がら。

ぼくの足もとでまだ震えている小さなかけら。』

なにかとりかえしのつかないことが起こったんだと、ぼくはようやく気がついた。

「どっちみち、これで最後なんだ」

最初に口を開いたのは、章くんだった。

ぼくらは章くん注目した。

「最後って？」

組んだ両手にあごをのせ、章くんはどこか一点をじつと見すえている。

「おれはさ、来年はもう高校生だ。いいかげんおまえらと遊んでるような年でもないだろ。今だって、これでもいちおう受験生だぜ」

「だからなんなの？」

ぼくがうわずった声をあげると、章くんはふっと苦笑^{くせう}いをして、

「だからさ、おれがここにくるのは、今年で最後ってこと。どうだおまえら、うれしいだろ？」

シヤレにならなかった。

ぼくらはうちのめされた。うれしいどころか、こてんぱんにやられた。

だって章くんがいなきや、ぼくらの夏ははじまらないんだ。

その証拠しょうこに、

「ばか、そんな顔すんな。おまえらがまたきたいんなら、いいよ、かつてにつかえよ。おれから親父おやじにたのんどくから」

章くんがそういったとき、申しあわせたわけでもないのに、^⑨ ぼくらはいつせいにかぶりをふっていた。

この別荘は章くんのものだ。おじさんなんて、関係ない。

^⑩ 章くんは意外そうにぼくらをながめ、「そうか」と、低くつぶやくと、強引にこの話をうちきるようにして腰こしを浮かした。

「じゃ、おれはちよつとじやがまる見てくつから。おまえら、さきに昼飯のしたくでもしてろ」

章くんは急ぎ足で玄関げんかんにむかい、ぼくらは音のないリビングルームに取り残された。この夏のどこかに、^⑪ エイエンに、取り残された気がした。

『アーモンド入りチョコレートワルツ』森絵都

注1 蜃気楼・・・光の曲がり具合によって、地上や水上にあるものが本来あるはずのない位置に見えること。

注2 うだるような・・・頭がゆで上がるような感じがするぐらいのあつさを表す。

注3 恭くん・・・ぼくの名前。

問一 ―― 部①「偽物のおせじをふりまいていた連中」とはだれのことですか。本文中より当てはまる人物を全てぬき出しなさい。

問二 ―― 部②・③・⑥・⑧・⑪のカタカナは漢字に直し、漢字はひらがなに直しなさい。

問三 ―― 部④「つつかえつつかえ、ナスが慎重なカタカナ読みをする」とありますが、なぜナスはこのような読み方をしたのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 英語がすごく苦手でカタカナ読みしかできなかったから。 イ 学校で習っていなかったのが簡単には読めなかったから。

ウ 章くんには英語ができることをかくしておきたかったから。 エ 急に章くんには英語を読むように言われておどろいたから。

オ ふざけて音読することで章くんをばかにしたかったから。

問四 ―― 部⑤「やばい。こいつはやばいぞ」とありますが、ぼくはどのようなことを「やばい」と思っていますか。三十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問五 ―― 部⑦「まっふたつに割れた貝がら。こなごなに砕けた貝がら。ぼくの足もとでまだ震えている小さなかけら。」とありますが、この部分はどうのようなことを表現していますか。三十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問六 ―― 部⑨「ぼくらはいつせいかぶりをふっていた。」とありますが、ぼくらがそのような行動をとったのはなぜですか。二十字以内で答えなさい。(句読点は字数に入れません。)

問七 ―― 部⑩「章くんは意外そうにぼくらをながめ」とありますが、どうして「意外」に思ったのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 章くんはだれか一人は自分の提案を聞き入れるだろうと思っていたのに、だれも聞き入れなかったから。

イ 章くんは恭たちがきつと自分の思い通りになるだろうと思っていたのに、恭たちが歯向かったから。

ウ 章くんは恭たちが毎年別荘で過ごす時間を楽しんでいたと思っていたのに、恭たちが不満に思っていたから。

エ 章くんは自分が来なくても別荘が使えろと言えば恭たちが喜ぶと思っていたのに、恭たちが喜ばなかったから。

オ 章くんは自分が親父に頼めば恭たちが喜ぶと思っていたのに、恭たちが自分で頼みたがったから。

問八 本文の内容に当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 章くんはかくれて不満を口にしていたぼくらに対して腹立たしく思っていた。
- イ じゃがまるはこれまでと同じようにこの五人で夏を過ごしたいと思っていた。
- ウ じゃがまるは自分以外の全員がこの夏にすっかり変わってしまったと思っていた。
- エ 章くんは英語が少しもできないぼくらに今までの復習をさせようと思っていた。
- オ 章くんはぼくらの悪口のせいでもう五人で別荘に来るのはやめようと思っていた。

このページには問題はありません